

# 対馬で学ぶ 対馬を学ぶ

～“域学連携”で対馬の新たな価値と地域活力を創出～

☆フィールド提供 ☆受入サポート



**域**

対馬での「学び」で  
地域おこしの人材育成

**連 携**

学生の意欲・行動力・  
大学教員のノウハウ・  
情報で、対馬の課題を  
解決サポート

**学**

☆人材派遣



『若い人は出ていくし、子どもは減るし、仕事もないし…。』

今、日本の田舎でよく聞かれるのはこんな話。でもあきらめるにはまだ早すぎる！

島に住む人にとっては当たり前でも、外から来た人が見れば「田舎だからこ  
そある豊かな資源」は驚きの連続です。そんな宝物を掘り当て、大学の視点と若  
いエネルギーを取り込んで、地域に元気を取り戻そうというのが「域学連携」。

九州で唯一、総務省のモデル事業に採択された対馬市では、複数の大学と連  
携したプロジェクトが始まっています。

# 現在、上県町志多留地区で展開中の『域学連携』事業

## 短期合宿「島おこし実践塾」の開催

今年は、北海道から沖縄まで、  
全国13大学・専門学校から35名が参加



農地再生



講義



古民家再生



有害鳥獣対策



グループワーク



地域再生プラン発表

## 中期インターン研修の受け入れ

## フィールドワーク (調査・研究) の受け入れ



地域でのヒアリング調査



未来について、地域について  
熱く語り合う夜



東京理科大・お茶の水大による  
『除間』の研究



敬老会を企画

■インターン参加大学  
京都大学大学院地球環境学舎  
立教大学観光学部・社会学部  
・理学部  
日本大学生物資源科学部



東京海洋大・九州大による  
海洋保護区の研究

## 参加学生に聞く！

～対馬での学びの感想と対馬の魅力～



○フランスから日本、そして対馬へ

京都大学大学院 パートウ・サムエルさん

農山漁村の生活スタイルを研究するためにフランスから来ました。美しい景観、様々な伝統や古くからの知恵などが残る対馬に魅力を感じますが、子どもがいないことや空き家が多く見られるのは寂しいです。



○対馬の「余間」を研究

東京理科大学大学院 松田 広子さん

この夏、対馬特有の「余間文化」を学びに来島しました。ぶしつけなお祈りにも関わらずお宅を見させていただいたり、余間での暮らしを快くお話して下さったりと、みなさまの温かさを深く感じました。余間は複世帯の家族が気楽に、そして仲良く暮らすことができる素晴らしい文化だということを知りました。



○証券マンになる前に

立教大学 石川 祐伍さん

来年から証券会社に就職することが決まり、今のうちに離島の現状を知っておきたいと思いインターンに参加しました。1ヶ月間、観光客や民泊経営者への聴き取り調査等のお手伝いをしながら、対馬の皆さんの人情に触れ、すっかり魅了されました。いつか金融業界のノウハウを活かし対馬のために恩返ししたいです。



○私が育った「我が島（バシマ）」に恩返しを

沖縄国際大学 仲嶺 迅香さん

私の出身地である与那国島は人口1,500人。雇用の場がありません。将来島に恩返しをするための具体的な方法を学ぼうと、島おこし実践塾に参加しました。新たな発想や手法で持続可能な社会づくりにチャレンジする島おこし協働隊・木村幹子さんの姿を見てとても勇気づけられましたし、いくつものヒントを得ることができました。

## ～大学を身近に～対馬市域学連携地域づくり実行委員会

対馬市では、全国11大学の教員や地域関係者等で「対馬市域学連携地域づくり実行委員会」を設置しました。

大学が無い対馬でも、研修や調査研究等で学生や教員が対馬に常時滞在することによって、あたかも大学が身近にあるような環境を創り出し、対馬の地域おこしの後押しと担い手育成を進めたいと考えています。

そのためにも、域学連携のあり方や課題、具体的な連携手法について討議し、今年度中に「域学連携地域づくり推進計画」の策定を目指します。



糸長 浩司さん

・対馬市域学連携地域づくり実行委員会会長  
・日本大学生物資源科学部教授

### ○対馬での域学連携への期待

対馬との出会いは、志多留・田ノ浜でのヤマネコと共生したほ場整備事業です。それ以来、風土・文化・環境・人々に魅了され、地域の活性化に寄与したいと、学生や地域の方々との協働で「ツシマヤマネコ共生村協議会」を設置し、木庭作の復活・そばづくり・田んぼのオーナー制度に取り組んできました。昨年度からは、鳥獣被害対策の研究等、対馬との関わりは多様化してきています。今後は、他大の対馬との連携をはかり、「対馬学」「対馬連携大学」の構築に向けて活動していきたいと思っています。



阿部 治さん

・対馬市域学連携地域づくり実行委員会副会長  
・立教大学社会学部教授

### ○持続可能な社会のモデルに

現在、シカなどの獣害問題、過疎化による産業やコミュニティ・里山の衰退など、日本の多くの地域が「持続不可能」な状況に陥っています。この状況を打破し、「持続可能」な地域として再生していくことは、今を生きる私たちはもちろん、未来のためにも求められています。地域再生の重要な要素は、地域の資源であり、なにかんぞく「人材」です。すばらしいことに、いずれの要素も対馬にはそろっています。しかも「島」という環境はモデルとして最適です。対馬を舞台にした持続可能な社会のモデルは、夢ではなく、すぐそこに見えています。

## 域学連携座談会

やって来る人、受け入れる人、それぞれの立場で『域学連携』を語っていただきました。

### （原田）島おこし実践塾で学

生を受け入れることで地域が若返っています。平均年齢は68歳。人口が減り地域の維持が難しくなることを考えると、若い人に入ってもらい、力を借り、元氣を取り戻すことができるのなら嬉しいことです。島を出た地元出身者が地域の良さを再認識する機会にもなると思います。私たちには無い新たな発想の村づくりに期待に胸が膨らんでいます。

実は、実践塾の合間に私のほだ場でしいたけ原木の天地返しもやってもらったんですよ。一人じゃ大変できつい仕事ですけど、学生たちがやってくれて助かりました。

（重原）実践塾に参加していた学生が楽しそうにやっていたのが特に印象的でした。一



原田 義則さん  
上県町志多留区長



吉野 元さん

一般社団法人MIT研究員  
東北大学大学院卒（生命科学博士）  
環境コンサルティングの会社を退職し、今年6月に対馬へ移住

人でやるとつらい作業だけど、みんなやるとすごく楽しくなる。若者の有り余っているパワーを地域に入れるのは大事なことだと思いました。

（前田）農業や漁業の苦勞をリアルに体験することが今の若者には必要で、かつての対馬もみんなが集まって支え合っていたんですね。

（菅田）ここに来て感じたことは、耕作放棄地が予想以上に多いこと。また、昔のような婦人会や青年部が無くなり、意外と住民のつながりが少なくなっているのも残念です。若い力で農業をしたり、インターンや実践塾などでお世話してくださった人たちと、婦人会を再結成できたらいいなと強く感じました。

MIT：島おこし協働隊の木村幹子さんが中心となり結成された地域づくりのコンサルティング団体。域学連携では各事業のコーディネートを主として行っている

(原田) 人が減り、何もかも簡素化されて、そういうえば頻繁に集まって話せる機会が減ったと感じますね。

(サムエル) 私はフランスの田舎に生まれました。その後、あこがれの都会に住むことができましたが、自然と人間のつながりが深い田舎の暮らしが、今は最高だと感じています。港・山・海・美しい月が織りなす志多留の風景は素晴らしいですね。この前は、インターンの3人で敬老会のカラオケ大会を企画して、チラシを配ったり、趣味の笛を演奏させていただいたんです。

(原田) 粗品を配るだけになつていた敬老会を盛り上げてくれて、みなさん大変喜んでいました。

(重原) 農学部出身の私の周りには、田舎に住みたいという人は結構いるけど、つながりがないから結局企業に就職するんです。域学連携がそんな若者とつながるきっかけ



前田 剛さん  
対馬市役所  
地域再生推進本部



重原 奈津子さん  
京都大学大学院  
(里山管理を研究)

になればいいなと思います。

(吉野) ここに来る前は大企業を相手に、環境コンサルの仕事をやっていた、地球規模での持続可能な社会を目指していました。意義は感じていたけれど自分自身は人工的な生活をしていることに矛盾を感じていました。そんな時、僕とは反対に、ローカルで活躍している協働隊の木村さんから対馬の域学連携のコーディネートネットをとの誘いを受け移住を決めました。自然が豊か、人が温かい、ごはんがおいしい！稀少な野鳥も身近にいる！今の暮らしは素晴らしい一言です。この資源を生かして、いかに自給自足や収益を考えていけるか。エコツーリズムや子どもたちの環境教育プログラムにも興味を持っています。利益だけじゃない、人として生きていく価値の高いビジネスを目指したいですね。(サムエル) 文化は自然と人間の関係から生まれていて、

その田舎の生活を守ることはとても大事なことでないでしょうか。

(前田) 本土だと学生や教員が気軽にボランティア活動とか社会奉仕活動ができますが、島だとそのような形で連携することも難しい。でもそのハイクラスな乗り越えなると対馬の活性化は厳しいと感じます。学生らが常々滞在して調査研究や活性化の後押しなどを取り組んでくれたら、多大な情報を持つ大学のキャンパスがあるのと同じようになります。寺小屋風に学生が島の子供たちに勉強を教えているという事例もあります。

(吉野) 地域の技術と若い活力でこれまでになかったものを創りだすことができれば…。

(重原) 志多留の名物をみんなで創りたいねと話していますし、子ども達への食育も行えるような田んぼのオーナー制度も提案したいと考えています。



菅田 奈緒美さん  
京都大学大学院  
(集落営農を研究)



サムエルさん  
京都大学大学院  
(農村の研究)

(菅田) 余った野菜を無人市に出す仕組みや、おばあちゃんたちの拠り所となるような地元産品のお店ができないかなとか…。

地域に何か還元して帰りたいです。

(サムエル) 対馬が気に入りました。ここでの経験を修士論文のテーマにしたいと思っているのも、また来年も来ます！

(原田) 若者の柔軟な発想で、生活を維持できる6次産業を展開してもらえたら。そして何よりここでの生活を楽しんでもらいたいのが一番です。

(吉野) 10年先には、ここ対馬のライフスタイルが世界で注目されるものになっているかもしれません。

#### 仕掛け人



島おこし協働隊  
木村 幹子さん  
(志多留在住)

第6次産業：第1次産業である農林水産業が、生産だけにとどまらず、それを原材料とした加工食品の製造・販売や、地域資源を生かしたサービスなど、第2次産業や第3次産業にまで踏み込むこと。

### 「学びのフィールド」への挑戦

大学進学が普通になった今、子どもたちの殆どは高校卒業後に島を出ます。20代という最も血気盛んで体力もある世代が、すっぽりと抜けているのです。大学がある地域では、学生によるボランティア活動などによって、**学生が地域づくりの大きな担い手**になっています。

対馬は自然・文化・歴史・全てにおいて極めて特徴的で、何よりよそ者を温かく迎えてくれる気風があります。**学生を魅了する要素が揃っている**のです。学生の熱意や行動力を、対馬の元気に繋げたいと思っています。